

第二回日本機能性香料医学会

The 2nd Annual Meeting of Japanese Medical Association of Functional Fragrance

看護とアロマの出会い



併催：第二回日本ヘルスケアプロダクツ研究会

抄録集

会期：2021年 12月17日（金）▶ 18日（土）

大会長 佐藤 光栄 （東都大学ヒューマンケア学部看護学科教授）

実行委員長 関 優美子（神奈川歯科大学短期大学部看護学科教授）

開催顧問 神保 太樹（令和メディカルリサーチ医学研究所所長）

会場：東京都立産業貿易センター 台東館 東京都台東区花川戸 2-6-5





12月17日

13:00~13:20

**理事長
講演**

Withコロナに向けたヘルスケアプロダクツ

演者 神保 太樹

(株式会社令和メディカルリサーチ医学研究所 所長・他)

13:30~14:00

**教育
講演**

桑の葉エキスにプロポリスを配合した
「桑ポリス®」の臨床効果についての検討

演者 村田 幸治 ほか

(斐川生協病院)

14:15~15:15

**特別
講演**

漢方アロマの世界※

演者 系数 七重

(日本薬科大学 漢方薬学科 講師)

15:30~16:30

**特別
講演**

嗅覚研究の最近の話題※

演者 関 一彦

(帝京平成大学健康医療スポーツ学部 作業療法学科 学科長)

16:30~17:00

**特別
講演**

生体環境調整作用®素材“PROUSION®”
含有貴金属製品の酸化還元電位測定報告

演者 橋本 政和

(NPO法人日本健康事業促進協会 理事長)

※講演タイトルは変更されることがあります。



12月18日 (午前)

9:30~10:20

**大会長
講演**

機能性香料 (アロマ) における全人的医療の発展

演者 佐藤 光栄

(東都大学 ヒューマンケア学部 教授)

10:30~11:20

**委員長
講演**

看護と韓方アロマ

演者 關 優美子

(神奈川歯科大学短期大学部 教授)

11:30~13:00

※ランチョンセミナーは、COVID-19感染拡大防止
の観点から中止となりました。

12月18日 (午後)

13:00~14:30

**教育
講演**

アロマのいやし・看護実践への取り組み

~自分の五感への癒し~

演者 徳田 真理子

(日本臨床アロマセラピー学会 理事長)

14:40~15:40

**教育
講演**

鍼灸治療における香りの機能

演者 志茂田 典子

(ACURE研究所 所長・他)

With コロナに向けたヘルスケアプロダクツ

Healthcare Products for living with Covid-19

神保 太樹

株式会社令和メディカルリサーチ 医学研究所所長

講演要旨

我が国における新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の蔓延は、一旦は落ち着いたとは言え、いまだ明確な先が見えない長いトンネルの中にあると言えるだろう。国際的にも、オミクロン株などの新たな変異株の拡大を受け、想定されていたアフターコロナ時代への移行は、まだ先のことと見るのが現実的だという見方も多い。

昨年も、弊会は COVID-19 の感染拡大の切れ目に運よく会を実施することができたが、今年も同様に、ちょうど緊急事態宣言が解除された切れ目の時期、うまく開催することができたことは幸運といえるだろう。

さて、今年は規模を少しだけ大きくし、2日間の日程とした。1日目には研究発表などを含めたやや学際色の強いプログラムとした。そして2日目には、今回のテーマであるアロマと看護にスポットライトをあて、実践的報告やワークショップを中心としたプログラムを採用している。

このプログラムの示すように、ヘルスケアを支えるものは、研究だけでもないし、実践だけでもない。両者がうまくかみ合うことで、最良の結果が導き出されると私は考えている。コロナとともに生きる、つまり With コロナ時代を生き延びるためのヘルスケアプロダクツの戦略もまたそのようであるべきであると考えているが、いわゆるヘルスケアプロダクツは、必ずしも医療機器だけではない。サプリメントや医療機器とまでは言えないような各種の健康器具もまた、使い方によっては我々が今後生き延びていくための力となるだろう。特にサプリメントについては、その時々の環境の影響をよくうけると言える。例えば COVID-19 の流行により、免疫に対する関心がたいへん高まっており、その結果として乳酸菌などによる免疫刺激作用の研究などが注目されているように見える。

このような状況を鑑みて、まずは当会の目指すところの“ヘルスケアプロダクツ”とは何かを再定義し、同時にその中で、機能性香料がどのような役割を担っていくかなどを、COVID-19 についての復習とともに再度考えてみたい。例えば、このほど刊行された新規の学術誌である「機能性香料医学」では、ゼラニウムなどの精油が COVID-19 による嗅覚障害を緩和する可能性について触れているが、マスクなどにこうした機能性香料を添加することで、優れたヘルスケアプロダクツが生み出されうる。そして、それがどのように人を豊かにするのかについて、我々は未来を見据えて考えなくてはならない。

以上を踏まえて、まずは最初のイントロダクションとして、ヘルスケアプロダクツと機能性香料の今後を考えていきたい。

演者略歴:



株式会社令和メディカルリサーチ医学研究所所長、トリノ大学医学部客員教授、愛知医科大学先制・統合医療センター研究員など。昭和大学医学部解剖学第一講座兼任講師、ドイツ Viadrina 大学客員講師、日本アロマセラピー学会副理事長、日本総合診断医療研究会常任理事、日本長寿健康応用学会理事、日本補完代替療法学会幹事、日本健康促進医学会評議員、日本関西アロマセラピストフォーラム顧問等を歴任。鳥取大学医学部生体制御学講座にて、アルツハイマー病を中心として認知症の治療に関する研究と、アルツハイマー病患者における嗅覚障害の出現率に関する研究を行い博士号を取得。その後昭和大学医学部顕微解剖学講座等を経て現職。研究テーマは fMRI や fNIRS 等の脳機能イメージングを用いた嗅覚機序の解明と応用、及び高齢者介護における嗅覚の利用法についてを中心に、サプリメント等のモニタリング調査なども実施している。最近ではヘルスケアなどの開発に関するコンサル事業も手掛けている。



桑の葉エキスにプロポリスを配合した「桑ポリス®」の臨床効果についての検討

Clinical study on the effects of a mixture of mulberry leaf extract and propolis

村田 幸治¹⁾、小野寺 敏²⁾、八並 一寿³⁾、安田 桜子⁴⁾、河村 裕文⁴⁾

1) 斐川生協病院、2) 未病総合治療院、3) 玉川大学農学部、4) クワポリスジャパン(株)

講演要旨

1999年に相模原市産の桑から抽出した桑の葉エキスと機能的に相乗効果が見込めるブラジル産プロポリスを見出し、「桑ポリス」(液剤: 1日の摂取量として、桑の葉エキス 200 mgとプロポリス 31.2 mgを含有)を開発した。桑葉の血糖降下作用は、桑葉に含有されるデオキシノジリマイシンによることが知られている。また、プロポリスは、インスリン抵抗性指数を用いた動物実験により、インスリン抵抗性の改善が報告されている。「桑ポリス」の2型糖尿病への効果については、これまでに一般的治療(食事療法、服薬治療等)により血糖値の改善が不十分であった2型糖尿病患者を対象に臨床試験を実施し、空腹時血糖値とHbA1c値が大きく改善したことを報告した。

近年、ブラジル産プロポリスの摂取により、2型糖尿病患者で腎症の進行を遅らせる可能性や、長期の糖尿病患者で体内の糖がタンパク質と結合すること(糖化ストレス)により観察される終末糖化産物(AGEs)の形成と蓄積が筋肉で抑制されたことが報告されている。糖尿病患者に限らず、「糖化」は「酸化」と共に老化要因の一つとされ、皮膚では表皮や真皮のコラーゲン(皮膚や腱・軟骨などを構成する繊維状のタンパク質)が、「糖化」のターゲットとして注目されている。今回、「桑ポリス」のソフトカプセル製剤を開発し、健康成人を対象に、「桑ポリス」の機能性について、①血糖値及びインスリン抵抗性に対する効果、②脂質に対する効果、③AGEsの蓄積及び皮膚に対する効果(肌の明るさから判定する「美白値」(肌が明るい点数が高い)と、肌の黄ばみと明るさから判断する「エイジング値」(肌の黄ばみが弱く肌が明るい点数が高い)を採用)、及び④肝機能や腎機能に対する安全性について、臨床試験を実施した。健康成人 25名(平均 50.8歳)が、コントロール用のカプセル(桑の葉エキスとプロポリスを含有していない)を1か月間、続いて臨床試験用のカプセル(桑の葉エキス 120 mg/1cap とプロポリス 18.7 mg/1cap を含有)を1か月間、1日に6カプセル摂取した。血液検査と皮膚状態の測定を計3回(開始前、コントロール用カプセル摂取1ヶ月後「以後、プラセボ後」、治験用カプセル摂取1ヶ月後「以後、治験試料後」)、AGEsの蓄積量を計2回(開始前と治験試料後)、行った。個人的な都合により、2名が治験試料後の血液検査と皮膚状態及びAGEsの蓄積量の測定に出席できなかった。検査値は対応のあるt検定を行い、p値<0.05を有意とした。本研究は、NPO法人日本健康事業促進協会研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。結果は、「開始前」と「プラセボ後」では、上記①のHbA1c値が有意に低下(5.48%→5.39%, p<0.01)し、②のHDLコレステロール値が有意に上昇(63.3 mg/dl→67.6 mg/dl, p<0.01)していた(本来の意味でのプラセボ効果と考えられた)。血液検査の他の項目や皮膚に対する効果には、有意差を認めなかった。次に、「プラセボ後」と「治験試料後」では、①のHbA1c値が有意に低下(5.39%→5.34%, p<0.05)し、②のHDLコレステロール値が有意に上昇(67.6 mg/dl→70.1 mg/dl, p<0.05)していた。③の美白値が有意に上昇(48.6点→50.8点, p<0.05)し、エイジング値も有意に上昇(48.9点→53.0点, p<0.05)していた。また、④の腎機能クレアチニン値が有意に低下(0.70 mg/dl→0.67 mg/dl, p<0.05)していた。さらに、「開始前」と「治験試料後」で、③のAGEs値が有意に低下(228[糖化年齢:約60歳]→220[同:約57歳], p<0.05)していた。

以上から、「桑ポリス」ソフトカプセル製剤は、健康成人において、過去1~2か月間の血糖の平均値とされるHbA1c値の改善効果に加えて、脂質と腎機能の改善効果が期待できることが判明した。さらに、表皮のAGEs蓄積量が少ないほど肌の透明感が高くなる可能性があることが報告されており、「桑ポリス」ソフトカプセル製剤により皮膚へのAGEs蓄積が抑制されることで、肌の美白効果が期待できると考えられた。安全性では肝機能・腎機能への有害性は認めなかった。

演者略歴:

1998年3月: 島根医科大学(現島根大学)医学部医学科卒業。2008年4月: 日本補完代替医療学会認定 補完代替医療学識医。2012年3月: 金沢大学大学院にて博士(医学)取得、同年4月: 山陽学園短期大学食物栄養学科准教授。2013年4月: 山陽学園大学大学院看護学研究科准教授、同年11月: 日本補完代替医療学会理事。2014年4月: 山陽学園大学大学院看護学研究科教授。2020年10月: 斐川生協病院内科(常勤医師)。現在に至る。

漢方アロマ”の現状と可能性

Current Situations and Potentials of “Kampo Aroma”

系数 七重

日本薬科大学

講演要旨

“漢方”と“アロマ(アロマセラピー)”は、本来互いに関連しない独立した概念である。しかし、日本薬科大において、いわゆる現代西洋医学に対して補完的に存在する伝統医学(漢方など)およびホリスティックケア(アロマセラピーなど)を総合的に学ぶ《漢方アロマコース》を医療・介護・福祉従事者を中心とした社会人向けの職業実践力育成コースとして開設したことから、“漢方アロマ”というものに関する問い合わせや“漢方アロマ”を学びたいという期待を寄せられることが多くなった。

そこで本講演においては一般生活者が“漢方アロマ”をどのようにとらえているかの現状を主にネット検索で得られた情報から示すとともに、漢方や中国伝統医学、広義のアロマセラピーとしての“香”、そして精油を用いた一般的な意味におけるアロマセラピーという概念がどのように関わり得るのか、またそれらの知識によって期待できるアロマセラピーの展開の可能性について、香材料の性質、香の歴史的な使用法、そして現在新たに表れてきた「精油の陰陽五行」という考え方を紹介しつつ示してゆく。

漢方処方や中医薬に配合される生薬で、香材料としても用いられるものは数多く存在する。また、香に関する中国の歴史的書物中に記された香材料には、漢方・中医処方の構成生薬として配合されることは少なくとも、薬性・薬能(いわゆる効能効果)に相当する記述がなされていることが多々ある。宋代に記された《香譜》、《陳氏香譜》および明代に記された《香乘》に記載された香材料から主要なものを取り上げ、それらが漢方薬・中薬に配合される際の位置づけ、および香材料としての使用の歴史・用いられ方を概説し、“漢方”と“香”(特に医療的な意味を有するもの)の関連性を示す。

また、東洋思想の認知度が向上するに伴い、欧米においてもそれまでの文化(特にホリスティックケアに類するもの)に東洋思想(あるいは単に東洋的なもの)を結びつけて差別化を図ろうとする動きが出てきている。これは例えば「アロマセラピーとリフレクソロジーを結びつける」「アロマセラピーと占星術を結びつける」等と同様な、ホリスティックケアの複雑化と発展のひとつと考えられる。つまり、精油に陰陽五行説を応用し、ケアの方法論に東洋医学的なものを取り入れることで、アロマセラピーを用いてこれまでとは異なった、より満足度の高いケアを提供しようとする動きであり、一般生活者から“漢方アロマ”の名で期待を寄せられやすいのもこの考え方であると判断できる。このような「アロマセラピー+東洋的なもの」では実際に各種精油にどのような「東洋的役割」が与えられ、どのような運用がなされているか、また、これらは今後のアロマセラピーにどのような展開をもたらさうかという可能性を示す。

演者略歴:

日本薬科大学薬学部漢方薬学分野講師・同大学漢方資料館学芸員補。東京大学薬学部卒。同大学院薬学系研究科修士課程・医学系研究科博士課程修了。博士(医学)、薬剤師。国立医薬品食品衛生研究所生薬部研究員、武蔵野大学薬学部一般用医薬品学教室助教を経て現職。医療関係者を中心とする一般社会人に統合医療を幅広く紹介する目的で開講される日本薬科大学漢方アロマコースのサブディレクターも務める。専門は漢方薬学・社会薬学・統合医療。日本薬科大学の姉妹校である台湾・中国医薬大学の都築伝統薬物研究中心研修派遣研究員として日本と台湾を往来しつつ、漢方・薬膳、およびそれらの知見に基づく地域連携活動に関する研究および教育、実践を行なう。



嗅覚研究と最近の話題

Recent Topics in Olfactory Research

関 一彦

学校法人帝京平成大学 健康医療スポーツ学部 リハビリテーション学科長

講演要旨

嗅覚は、五感の中で低下が自覚されにくく低下のまま放置され易い感覚である。わたしがヒトの嗅覚に関心を持ち、臨床にて研究らしきものを始めたのは 1995 年であった。認知症は痴呆と呼ばれており、その分類も指標もやや曖昧な状況であった様に記憶している。医師は、アルツハイマー型認知症 (Alzheimer's disease; 以下 AD) やパーキンソン病 (Parkinson's disease ; 以下 PD) の確定診断などに苦労されていた。私は、作業療法の一環で行っていた、病棟での嚥下訓練(食事)での患者の表情や反応に疑問をもった。“はたして患者さんは、この食べ物のニオイを分かっているのだろうか。あまり美味しく感じていないのでは”。上司(副院長・神経内科・リハビリテーション科部長)へその事を伝え、即答、“君もそう思うの” だった。さらに、簡易的な嗅覚検査器具(手作り)での嗅覚評価の許可を確認すると“オモシロイね～どンドンやってみて”、快諾であった。早速調査を行い、翌 1996 年、第 30 回、日本作業療法学会で「痴呆とにおい識別能力との関係について」の演題を発表した。上司の柔軟な対応と私の“なんとなく”の思いと第六感、その後の幾つもの経験や偶然などが研究テーマを後押しして、現在に至っている。不思議と言えば不思議であるが、それもまた嗅覚表と裏の顔を持つ不思議な感覚である嗅覚と通じるものがあり、実にオモシロイところでもある。

一方、COVID-19(新型コロナウイルス)感染の一般症状のなかには、嗅覚消失、鼻詰まり(鼻閉)、鼻漏など鼻に関係したものがあり、特に嗅覚消失が注目されているのは周知の通りである。浦田ら(2021)[※]は、COVID-19 感染の場合、ウイルス感染後早期に嗅上皮脱落が生じ、感染後 21 日でも一部の嗅上皮は再生が不完全であることを明らかにした。ただ問題は、多くの医療関係者や様々なメディアでのコメントが意外にアッサリであり、その先の問題に至ることが少ないことである。つまり、長期化する嗅覚障害は単なる機能低下の枠に納まらない。その証拠に COVID-19 感染後の長引くウツ症状も大きな問題となっている。嗅覚は、五感(視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚など)の中で唯一旧脳(大脳辺縁系)への直達回路でもあり、感情や本能行動に深く結びついているとされる。また嗅覚に関係する終脳部とされる嗅脳は、大脳辺縁系など原始的な旧脳とも広く重なってくる。その意味は、生物の進化や生きていくための捕食行動に大いに関係する。即ち、食べるか食べられるか、生きるか死ぬかに関する外部情報を得るための最も重要なセンサーが嗅覚である。その部分の修復が遅れる事がヒトの感情や情動に影響を及ぼすことは想像するに難くない。嗅覚障害は、さまざまな要因で起こる事ってくる。AD や PD などの神経変性疾患を担当する際は、かなりの高い確率で嗅覚障害があると考えて対応した方が無難である。今回は、障がい者や利用者の生活機能や QOL に深く関わる作業療法士の立場から、嗅覚障害のもつ意味を考え、その課題や今後の展望などについて概説したい。

※ 浦田 真次・岸本 めぐみ・山嵜 達也：新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) 感染モデルにおける嗅上皮の変化～COVID-19 による嗅覚障害の病態解明や治療法開発の加速に期待～, ACS chemical neuroscience (オンライン版: 2 月 1 日), 2021.

演者略歴:

2012 年 帝京大学 福岡医療技術学部 作業療法学科 教授・主任

2015 年 帝京平成大学 地域医療学部 作業療法学科 教授

2016 年 帝京平成大学 地域医療学部 作業療法学科 教授・学科長

2017 年 帝京平成大学 健康医療スポーツ学部 作業療法学科 教授・学科長

2019 年 帝京平成大学大学院 健康科学研究科健康科学専攻作業療法学分野博士課程 教授;(現在)

2021 年 帝京平成大学 健康医療スポーツ学部 リハビリテーション学科 教授・学科長・作業療法コース主任;(現在)



生体環境調整作用[®]素材“PROUSION[®]”含有貴金属製品の

酸化還元電位測定報告

Report on measuring the redox potential of precious metal products

containing the biological environment adjusting action material “PROUSION[®]”

橋本 政和

NPO 法人 日本健康事業促進協会

講演要旨

【緒言】生体環境調整作用[®]素材とされるプラウシオン[®]含有品については、末梢血流や自律神経への影響の他、「フリーラジカル除去効果」(Pan Jia-Hu, Masakazu Hashimoto et al. 「Effects of prouision on scavenging free radicals」『Acta Pharmacologica Sinica』2003 April; 24 (4)289-384, 2003) が確認され、「筋衛星細胞の活性化及び抗酸化作用に影響を与える可能性」(安納弘道, 橋本政和「ジャンプトレーニング後の遠赤外線環境暴露がマウス下肢骨格筋に与える影響」第21回日本トレーニング科学会大会、2008年) も示唆されている。

さてこれ迄、素材と製品の効果についての検討はあるが、経年劣化の検証は行われていない。

含有製品の効能についての劣化確認や配合確認の端的な方法として、酸化還元電位測定がある。酸化還元電位の水または水処理分野への適用は、都市下水の処理においてすでに今世紀初期からなされ(武藤暢夫他 「酸化還元電位値に影響を及ぼす要因に関する実験的検討」『水質汚濁研究』第9巻第10号、661-667、1986)、素材が適切に配合されていれば酸化還元を確認できる。

また酸化は細胞、組織の劣化、老化を促し、様々な生活習慣病の要因となる。生体内外で発生した活性酸素やフリーラジカルは脂質、糖、蛋白質、DNA等を攻撃し、脂質や糖の酸化、蛋白質の変性、酵素の不活性化、そしてDNAの塩基修飾や主鎖の切断を引き起こし、その結果、種々の疾病や老化を誘発、促進すると考えられている(野口範子「運動に関連する酸化ストレスと抗酸化作用」『日本運動生理学雑誌』第10巻第1号、1-8、2003)。生体の酸化抑制は、健康維持の必要条件である。

【測定】測定器：東亜ディーケーケー株式会社製「ガラス電極式水素イオン濃度指示計 HM-40P」

試料：0はサンプル品。1-4はお客様使用品。5-7は直近製造未使用品。8-9は一般製品。

方法：①水道水をビーカーに取水 ②測定器を入れ、電位が安定するのを待つ ③試料を入れ、5分間隔で30分間計測 ④1試料毎の測定後には、精製水で測定部を洗浄する。

【結果】1 測定用に使用した水道水は、時間経過に従って酸化している。

2 素材を入れないミネラルウォーターは、時間経過に従って酸化している。

3 一般貴金属製品は、還元しない。但し還元には至らないが、酸化抑制しているとみられる。

4 プラウシオン[®]含有貴金属製品は、酸化を還元する。

5 長年使用した貴金属製品であっても還元は確認され、効能の経年劣化は認められない。

演者略歴：

1953年 静岡県静岡市清水区 生まれ、生理学博士、NPO法人日本健康事業促進協会 理事長、有限会社 光 CO-EI 栄代表取締役、アジア国際健康促進・未病改善医学会 顧問、全日本空手道連盟和道會 千秋会四端塾 塾長、世界伝統空手道連盟 顧問



「機能性香料(アロマ)における全人的医療への発展」

Development of Functional Flavors (Aromas) for Holistic Medicine.

佐藤 光栄

東都大学ヒューマンケア学部 教授

講演要旨

【はじめに】

今回の研究会のテーマとして「看護とアロマの出会い」としたのは、看護場面における機能性香料(アロマ)が使われているはいますが、医療、治療の一環として使われているのではなく、癒しを中心としたケアに使われている現状があり、今後、エビデンスを集め、根拠のあるケアとして治療の中に組み入れていくことができるように研究による基礎データの積み重ねをしていけるような会としたいということでテーマとしました。

【アロマと医療】

我が国の臨床現場においては、治療として行われるのは、西洋医学が中心であり、薬効の明らかな漢方薬を併用して治療に用いることもある。

【医学】生体の構造・機能および疾病を 研究し、疾病の診断・診療・予防の方法を開発する学問。

【医療】医療で病気をなおすこと。

と定義されている。

代替療法としても用いられているアロマではありますが、表情が変わる、痛みが軽減すると多くの利用者に言ってもらえるが、残念ながら今一つ、確率した地位がありません。もちろん、健康保険も使えない状況にあります。漢方薬は医師が薬物療法として併用して使われています。医師が行う医学と医療は同義語として使っていることが多い。

医師は保健指導にも関わります。健康診断もそうですし、保健所での公衆衛生活動もあります。健康維持活動としては、マッサージやサプリメントや、リラックスしたいときの「癒しケア」などとして利用している。健康ではあるが、肩こり、腰痛という訴えが多いが、かなりひどい場合でなければ、整形外科医の治療として受けることができないし、医師としても病気の範囲に入らなければ、治療方法を選び、施すことができない。未病状態を維持するには、癒しケアとしての施術を受けるしかない。

課題としては、どのようなときに、どのような容量をどのような方法で用いることが効果的であるかについて、研究データの蓄積を続ける必要がある。どのような症状に、どのような対象に、どれくらいをどの期間やどのような方法で毎日か、一日何回用いるかなどの実施方法に関する法則性のような内容が一般化できるようになると、将来的には発展することが期待される。

このように課題もありますが、看護分野での香料を用いたケアも取り入れられ、代替医療、統合医療、全人的医療の観点からも発展していく可能性が高く、看護分野における必要性や有効性を明示していくことは重要なことであると思われます。

演者略歴:

2016 年度 - 2018 年度: 東都医療大学, ヒューマンケア学部, 教授

2019 年度より 東都大学, ヒューマンケア学部, 教授



アロマのいやし・看護実践への取り組み

～自分の五感への癒し～

徳田 真理子

地方独立行政法人東金九十九里地域医療センター

東千葉メディカルセンター

講演要旨

私たちの生活の中には、様々な香りがあります。香りには、人それぞれ、好みがあり思い出す景色も異なります。気持ちをコントロールする際に、記憶の中にある楽しい思い出、悲しい思い出など言葉では、うまく表現できないことも香りによって軽減されることもあります。言葉ではなく、その人の五感に働きかける「香」。

現状の医療では、高齢化の問題やコロナ渦による先行の不透明さから不安、スタッフの疲弊など様々な課題もあります。自分自身のモチベーションを上げるために、自分の好きな香りを見つけて、生活の中に取り入れてみるのはどうでしょうか。

今だからこそ医療の中で、看護職自身が自らの五感を十分に活用し、看護実践に取り組めることが望まれていると考えます。看護師自身が健康で自分に余裕を持てることで患者の些細な変化に気づいて、看護実践にも取り組みののではないのでしょうか。

「香」のエビデンスは、まだまだ十分とはいいがたく研究としては、症例が多いのも現実です。しかし、「香」は、目の前の患者に寄り添いながら、一つ一つを積み重ね、患者の持てる力を引き出すきっかけになれると考えます。

「香」が看護の引き出しの一つとして、この時間は、皆様が自分も癒され「香」による看護の可能性も実感していただければ幸いです。

【内容】

1. 香りを楽しむとは
2. 植物・香りの可能性
3. 看護実践への取り組み事例の紹介

演者略歴:

専門学校、看護短大での教員、大学病院や医院などで補完代替療法を含む看護を実践し現職。

看護師・助産師・保健師、看護学修士

資格など: アドバンス助産師、NCPR インストラクター、J-CIMELS インストラクター、IFA アロマセラピスト・日本臨床アロマセラピー学会認定講師(CAS)・国際ボンディング協会(BBCS)、一社ハーブボールセラピスト協会認定校など

日本臨床アロマセラピー学会理事長



鍼灸治療における香りの機能 – 心の痛みと身体の痛み –

Function of fragrance in acupuncture therapy

– approach to mental and physical pain –

志茂田 典子

ACURE 研究所 所長

講演要旨

東洋医学では、体内の気のバランスを保つことで、免疫系、自律神経系、ホルモン系、情動系を調整することが知られているが、一般には、鍼灸治療は痛み治療の最後の砦といった認識であろう。身体的な痛みを患者が訴えたからといって、医学的な説明がつかない場合、今までは心因性の痛みとして捉えられてきた。ICD-10 では、「持続性身体表現性疼痛障害」、DSM-IV-TR では疼痛性障害と呼ばれていたが、2013 年に改訂版が公開された DSM-5 では、「疼痛」という言葉がなくなった。代わりに、それまで疼痛性障害と呼ばれていたものは、「身体症状性障害 (Somatic Symptom Disorder)」と呼ばれるようになり、苦痛を伴う身体症状と、それに対する異常な思考・感情・行動に主眼が置かれるようになっていく。鍼灸治療院には、このような患者が多い。その対策として、鍼灸治療にアロマセラピーを併用することが有効であることを紹介したい。

演者略歴:

鍼灸師、公認心理師

ACURE 研究所所長、株式会社エーアール代表取締役

東京福祉大学心理学部、目白大学看護学部非常勤講師

国立駿河療養所メンタルヘルス外来

武蔵野女子大学大学院人間社会・文化研究科人間社会専攻博士課程修了(修士・人間学)

(一社)日本アロマセラピー学会第 19 回学術総会大会長

好きな精油や香料を滴下するだけ！外出先でも手軽に香りを楽しめます

特許出願済・実用新案登録

マスクや衣服に！ 貼るアロマシール



多層構造

香料を滴下するのは一番上の不織布部分。ジワジワ多層構造内に浸透し、ゆっくり拡散。香りが持続。



パーソナルスペースのみ芳香

50cmまでは香り成分が確認でき、100cm離れると確認出来ません（芳香機能性評価実施）そのため他人に迷惑をかけることなく香りを楽しむことができます（香害・スメハラ予防）

裏漏れ・横漏れなし

通常の製法であれば精油や香料は粘着剤を破壊し一番下まで貫通・侵食してまいります。特殊多層構造がそれらを防止。



マスクにも貼れます

小さいサイズはマスク用アロマシールとして人気です。アロマスプレーはすぐに香りがなくなりますが、アロマシールにすると香りが持続し、濡れることなく手軽です。

成分変性なし

香料（精油など）そのままの成分が揮発するので熱や水などによる成分変性はありません。香りの効果をダイレクトに感じる事ができます。



オリジナルプリント

会社ロゴやオリジナルプリントが出来ます。白色やオリジナルプリントなど対応が可能。OEM・SPとして承ります。

アグライア・クリニカルアロマティックラボ株式会社

大阪府大阪市天王寺区舟橋町15-37
<https://www.aglaia-aroma.com/>

☎ 06-6768-6880
✉ info@aglaia-medicalaroma.com



株式会社令和メディカルリサーチ

研究開発のお手伝いを、手の届く価格で

- ・戦略コンサルティング
- ・マーケティング調査
- ・研究ソリューション提供
- ・専門家（教授等）のご紹介
- ・論文、記事等の執筆
- ・臨床研究の企画、実施

info@rmr.co.jp